



## 新刊紹介「世界のふしぎな色の名前」

城 一夫・カラーデザイン研究会著

(株)グラフィック社発行

定価：1,800円(税別) 207ページ

城先生の博識が結実した楽しい色名事典が登場しました。

内容は、「詩的な色の名前」、「あやしげな色の名前」、「暮らしにまつわる色の名前」、「ファッション・文化の色の名前」、「動物たちの色の名前」、「植物たちの色の名前」、「地名・人名の色の名前」に分けられ、最後に「ふしぎな色の物語」で締めくくられています。

一つの色名が、原則として1ページ構成になっておりその色の色票は、ページごとに描かれたユーモラスな絵として表現されており、心を和ませてくれます。巻末にRGBとCMYKを示した色票もあります。

最初に出てくるのが「ディドリーム(白昼夢)」という色名です。「霧につつまれた恋」、「尼僧の腹」、「犬神人色」、「コピー鉛筆」、「クレオパトラ」なども色名として紹介されています。想像してみてください。

人名に関わる色名に日本では役者色がありますが、本書では取上げられておりません。

猛暑で始まった今年の夏を、この本を眺め避暑にしてください。(永田泰弘)

## 源氏物語の色 -36「若菜下」- その1

光源氏は四十六歳の冬十月二十日、紫の上、明石の女御、明石の君、明石の尼君などを同伴した豪勢な行列にて住吉に詣でる。

現在は、埋め立てによって海岸から遠い大阪市住吉区の住吉大社であるが、以前は海のそばでこのあたりは「住の江(墨江)」と呼ばれていた。松の名所であり、平安時代、「住吉の松」を歌枕に、様々な和歌に詠まれている。

源氏一行の住吉参詣では舞楽「東遊」の奉納についても語られ、舞人の衣装は「山藍で摺った竹の葉紋様」とある。

山藍は野生の植物で、茎と葉の汁を染料として、型染めで模様を摺り、社頭で舞う舞人の青摺衣などに用いた。また、摺り染めは「延喜式」に公事と女子の裾(くん)以外に用いることは禁じるとあり、舞人や楽人のほか、天皇の野行幸に供奉する鷹飼の装束にも用いられたとされる。

紅葉の社頭に舞楽は終夜続く。海面、遙かなたを澄み照らす月あかり、松に降りた霜の白と背景の色彩描写も美しい。

装束や景色のみならず、波の音に響き合う舞楽の音色へと想像が広がる場面である。

(平山和香子)

## ● 色名に採用したい季語ー 1

● 白梅色(しらうめいろ)

早春。白を表現する色名は意外に少ない。花にまつわる色名は「卯の花色」程度か。白梅の厚みを感じさせる色として美しい表現になる。紅梅色と対にもなる。(Y2)



● 猫柳色(ねこやなぎいろ)

早春。川辺などに生える猫柳の銀灰色の花穂の色。(K20)



● 蓬色(よもぎいろ) 蘭春。

草餅に入れるよもぎの若葉の銀灰を帯びた薄緑色。(C50 Y40 K20)



● 朧月色(おぼろづきいろ)

蘭春。おぼろに霞んだ月面の色。(C10 M5 Y20)



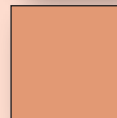
● 草餅色(くさもちいろ)

蘭春。蓬の葉を入れて搗いた草餅の緑色。(C60 Y50 K20)



● 甘茶色(あまちゃいろ) 蘭春。

ヤマアジサイの変種の甘茶の木の葉を煮出した灌仏会に使う甘茶の薄茶色。(M40 Y50 K10)



色票の色指定は、十分な検討を加えてから、確定する必要がある。今は仮の提案色として扱っていく。(永田泰弘)